教育計画とその実践

東洋英和幼稚園　椚　乙女子

幼稚園の保育計画の立案には、いろいろの方法やとくちょうがあるが、当幼稚園では、保育計画を子どもの実態に合わせて立案し、融通性をもって実施することにとくちょうがある。一年間の保育は単元活動により、内容は園児の生活や経験に関係の深いものが選ばれる。また、年中行事も適当に取り入れられ、教育要領に示された六つの領域に、宗教教育を加えた七つの領域にしたがって計画を立てる。一つの単元から次の単元への移行はできるだけ関連をもたせ、一年間を通じて計画の連関性が、流れのあるものとなるよう考慮している。単元の展開、運び方は各組によって異なり、それぞれの組の子どもに合わせた独自の活動を行うよう心がけている。しかし、互いに組の活動を知り合うために、単元はその内容を提示し、お互いが連絡して食い違いが生じないように留意する。そのため毎週教師会において大筋を協議して決定し、その実施は組の担任者にまかされる。細部にわたる計画は、時間によって細かく決定した日案は作成せず、その日その日の子どもたちの状態と、単元の内容、展開状態とを考慮して翌日の計画をたてている。

◇組編成　二年保育年長児

在籍数　二十一名
（男子八名、女子十三名）

担任教諭　一名

◇一日の標準プログラム

登園時刻九時

○自由遊び

○朝の集り（礼拝、話し合いなど）

○製作

○自由遊び（朝の自由遊びが活発に行われたり、または製作に興味がつづき、時間が延びたときは削除する）

○リズム（年長二組合併）

○降園（月・水十二時）

○昼食（火・木・金）

○言語指導その他

○降園（火・木・金一時）

右の各項目の実施時間は、その日の子どもの状態に応じて変化する。内容も天候やその他の事情によって多少の変化がある。

◇**単元**「郵便屋さん」

◎期間　一月二十一日～三十日

◎単元設定の動機

子どもたちは、正月に人に接する機会が多かったためか、グループ遊びが盛んに行われ、その行動には協調性が著しかった。そして数人で組み、協同でカルタやスゴロクなどを作った。協調性が著しくあらわれていると同時に、その活動には創造性が示されていて、紅白の球をりんごとみなしたり、ボタンをお菓子にしたお店ごっこをしたり、積木では、南極探険隊や捕鯨船ごっこなど、社会の出来事に関連したことを行い、遊びの中に、今までにも増して創造性がみられるようになった。そこで、第三学期最初の単元では、正月を取りあげ、社会的な行事に関心をもたせることを意図したが、その正月の習慣の一つである年賀状から引きつづき、一般の郵便という社会事象をとりあげた。わたくしたちの生活に、密接な関係をもつ郵便、郵便屋さんに対する興味と理解とを通じて、子どもたちに、社会の構成の一端を知らせることを意図した。さらに、文字に対する興味を養うためでもあった。

◎単元の目標

○郵便は、通信機関の一つであり、わたくしたちの生活とは、密接な関係をもつものであることを理解させる。

○郵便屋さんの働きへの認識を通じ、社会の構成と、協同の精神とを理解させる。

○わたくしたちのために働く郵便屋さんに感謝の念をもたせる。

○文字に対する興味を養う。

○郵便ごっこを通し、社会性を助長する。

◎単元の展開

正月の行事に興味をもち、正月の遊びを再現した子どもたちは、正月の習慣である年賀状に興味を示し、その経験を語り合う。年賀状から、一般の郵便についての話題をひき出した。郵便は、どんなときに使用するか話し合い、郵便によって、直接会えない人々と、話ができることを学んだ。子どもたちは、郵便に対する興味を起し、早速その製作にかかりたくなった。一人の子どもが、ポストを作りたいと申し出る。すると他の子どもが、「葉書を作る」といい出す。この二人の発言によって、子どもたちの、仕事に対する興味は郵便に集中し、郵便に関連をもったいろいろなものがあげられる。このとき、一人の子どもが、郵便ごっこをしようと提案する。子どもたちは、目を輝かして賛成し、このためごっこ遊びの話し合いとなり、仕事の分担がきめられる。教師も一役買って、黒板に分担を書き出す。郵便屋さんは一人でいいので、帽子や鞄は、一つでよいという案に対し、破損したときに困るので、二つ作ったらよいなど、仕事の量もきめられる。殆んどの子どもが、自分自身で仕事を選択したが、自己表示のうまくできないYと、国籍が異なるため言葉の上でハンディキャップのあるNのために、教師が助言を与える。分担は、一つのものに片寄らず、しかも、各自の興味によってきめられたが、このように、殆んど、教師の助けを必要とせず、子ども同志の話し合いによって、責任の分担がきまったのは、この組が、年長組であり、しかも、学年の終りの三学期にあることを感じさせた。これは、子ども自身がグループを意識し、責任感をもつことができるようになった、成長の結果といえよう。子どもたちは、一つの目標をもった仕事に、熱中する。それによって興味は助長さ

れ、ポストは、ダンボール箱を二つつなげた最新式の角型、鞄や帽子は、子どもたちのデザインで、ちゃくちゃくでき上っていく。この間、話し合いによって、郵便の種類や、配達される経路を理解させることに努めた。また、郵便局を見学し、その機能を理解した。この見学は、郵便局の働きを理解させただけでなく、さらに、興味を深めるために、よい刺激となった。

○郵便ごっこのための準備活動

子どもたちは、ごっこ遊びの準備のために、毎日、一生懸命仕事をした。じょじょにその準備ができてくるので、教師は、郵便ごっこが、自由遊びの中にあらわれることと予想していたが、一向にあらわれなかった。あるいは、興味がうすれているのではないかと心配したが、仕事の時間が来ると、子どもたちは、郵便ごっこに大きな興味をもっていることを発見して安心する。ごっこ遊びの計画を立てて、八日目の朝、遊びの中に、二人の郵便屋さんが出現した。番地や宛名の書いてない葉書を、積木の家へ配っているのである。このよい機会をとらえ、ごっこ遊びへ誘導してみたいと思い、葉書に番地や宛名の書いてないことを指摘し、ポストも使用するよう提案する。子どもたちは、準備が整ってから、いっしょにごっこ遊びをした方がいいと主張し、白紙の葉書で満足している。仕事は相変らず連続し、郵便受けまで作られる。準備が整い、ようやくごっこ遊びができる段取りになったので、その相談をもちかける。この時期に運悪く、小学部で入学のための面接が行われるため、女児たちは欠席し、一部の子どもたちだけではどうにもならない。つぎの日は土曜日でお休み、また、日曜日は雪が降ったため、郵便ごっこの興味はつづけられないことを予測して、クラス全体の郵便ごっこは断念し、遊びの中で、これを自由に使わせることにとどめ、つぎの、節分や、立春の単元へ切り替える予定をたてた。しかし、意外にも子どもたちの郵便ごっこへの興味は強く、月曜日の朝、その活動が展開された。その模様を、保育日誌から拾ってみよう。

二月四日（月）　立春　天候　快晴

◇保育予定

○雪についての話し合い。

○経験発表をもとにして、節分について話し合う。

○立春について話し合い、春のくることに期待をもたせる。

○製作　鬼、福の神のお面、升（豆まき遊びのため）

◇記録

昨日は雪が降り、日曜学校に出席の子どもたちは、明日は雪合戦ができると張り切っていたので、今日も雪が残っていたら、雪と思う存分遊ばせる予定をたてた。しかし今朝は、雲一つない上天気。夜半からの雨のため、雪は溶かされ、わずかに庭の隅に残されているだけで、子どもたちは、雪に少しも興味は示さない。

早く登園したS子とM子が、揃って郵便屋さんの衣装をつけて、紐とびをする。積木の好きなMが登園し、ホールの隅に積んである箱積木のところにいき、今日は何を造ろうかと考えながら、積木の山を一つずつくずす。これを見た郵便屋さんのS子とM子は、何やら耳うちすると、Mのところにかけていき、郵便局を造ってという。Mは快く受け入れ、友だちの助けを求めて構成にかかる。このときA子とJ子が登園し、郵便局造りを知り、その仕事に協力する。手伝いの子どもたちが増え、窓口のある、働き場の広い郵便局ができあがる。S子たちが自分たちの作った切手や葉書を、郵便局

にならべる。スタンプも用意する。郵便屋さんは働きだしたが、葉書や封筒には何も字が書いてない。教師はこれを見て、誘導によって、この遊びが広く展開することを予期し、ポストを使用したり、手紙を書いたりすることを提案する。子どもたちはすぐ賛成する。一方、この遊びに関心がなく、まりつきやなわとびをしていた子どもたちを、郵便ごっこに誘導する。すでに郵便局ができ、活動が始まっているので、その子どもたちは、喜んで誘いに応じ、手紙書きを始める。教師も子どもたちの仲間にはいり年少組へ宛てて手紙を書く。部屋の隅で、紅白の球を使って、りんごの店を開こうとしていたM子は、この動きを察して封筒や切手を店頭に並べる。年長の他の組の子どもたちも参加し、人数が多くなり、遊びは活発化してくる。手紙を書く子どもたちについてみると、年賀状は、大部分の子どもが正月に書いた経験をもっているが、宛名は親が手伝ったためか、表と裏の区別がはっきりしない。このことは、話し合いのときのよい材料となるので、気の付いたものに注意を与える程度にしておく。郵便屋さんは、字を書いた手紙を扱うことができるので、うれしくてたまらない。一人が一通の手紙をポストに入れると、すぐ配達する。また、手紙を書くものが、ポストに入れないで、自分でスタンプをついて配達するなど、一人で何役もする。遊びが落ち着くにつれ、各自、自分の仕事について主張し、分業ができるようになる。郵便局員も多かったが、返事を書くために整理され、遊びが順調に行われる。郵便ごっこに参加しないものは、YとNの二人の男児、文字に対してあまり興味がなく、誘いにも応じないで三輪車で遊ぶ。しかし、想像以上活発に、ごっこ遊びが展開されているので、朝の集りを遅らせ、遊びに充分な時間をとる。

郵便ごっこの場合、子どもたちの多くのものが興味をもち、また子どもたちは、帽子を被り、鞄をさげた郵便屋さんになりたがる。このため、誰が郵便屋さんになるかをきめるのに、困難が起きるのではないかと懸念したが、別にその心配はなかった。しかも、この郵便ごっこは、子どもたちの発意で行われたものとして興味が長く続き、また上手に、協力して遊んでいる子どもたちの姿をみて、その成長ぶりに驚き、また喜ばしく思った。しかし、参加できなかった二人の子どもは、字に興味がなかったからとはいえ、乗り物でも造らせて、郵便車にさせたなら、と後で反省した。

以上が、この日の保育日誌の一部であるが、この日の保育計画は、郵便ごっこのためにすっかり変えられてしまった。そして、朝の集りのときに、宛名の正しい書き方について話し合った。葉書の方は、知っている子どもが多かったが、封書の方は、殆んど知らなかった。一般に、自分の間違いを、人に指摘されたことがらは忘れにくいが、これと同様に、子どもたちも、経験のあとに問題をとりあげたので、効果的であったと思う。

◎単元の終末

子どもたちの、郵便ごっこの興味は、一度に放出されてしまったので、この日が頂点となる。つぎの日は、半数位の子どもたちによって繰り返されただけだった。そして郵便は、昨日使ったもので新鮮味もなくなり、新しく作る意欲もなくそのまま、終り頃になって、お家ごっこと結びついた遊びとなった。

ごっこ遊びの興味も、次第にうすれて来たので、続いては、手紙を書くことの興味を利用し、郵便屋さんに感謝の手紙を書くことを、終末活動とした。そして、子どもたちの提案により、手紙だけ

でなく、花瓶や壁かけを作り、それらを持って再び郵便局を訪れ、「郵便屋さん」の単元を終えた。

◎単元の評価

年長ともなれば、言葉の理解を充分することができ、話し合いによっての理解もできるのであるが、具体的に、目で見た方が、もっとよく理解する。また、それに加えて、体験を通して理解することが、さらによいと思われる。よく、子どもたちはおままごとの中で、おとうさんやおかあさんになる。このことは、おとうさんやおかあさんになることによって、その仕事や位置を理解するといわれる。この意味で郵便屋さんも、話し合いや見学に加えて、ごっこ遊びができたことは、よりよい理解の助けになった。教師もごっこ遊びを予定したが、その案を出す前に、子どもの方からの要求があったことは喜ばしいことであった。子どもたちが、体験を通しての理解を必要としている一つのあらわれであると思う。

幼児には、感謝の気持を形にあらわすことは難しい。言葉にもなかなかでてこない。お礼の手紙を書くことが、感謝をあらわす一つの方法であることを理解させたが、このことは子どもたちも喜んで参加し、さらに、花瓶や壁かけまで作って、感謝の気持をあらわせたことは予想外であった。見学によって、直接、郵便屋さんと接することができた。このことが、郵便屋さんに対して親密感をもたせ、感謝の気持をもたせたからである。

もうすぐ小学生になるという意識をもっている子どもたちは、文字に対して強い興味を示している。全部の子どもが字が書けるようになっている現在、字を使う機会が与えられたわけである。それも、遊びの中で、楽しんで使うことができた。

子どもの社会性は、遊びの中でよく理解することができる。したがって、社会性の発達の具合でごっこ遊びも発展する。ごっこ遊びが自主的に行えたことは、子どもたちの社会性が、良い方向に伸びて来ていることのあらわれであり、お互いに尊重し合えるようになった結果であると思う。そして、子どもたちは、自らの協力した社会の一事象を知り、社会の一員としての在り方を、身につけていくことであろう。

わたくしどもは、保育を行っていく上に、計画をたてている。しかし、その計画は、毎日その通りに実践されているかどうかよく問題になる。しかし、予定通りに実践されないのが当り前のことではないだろうか。なぜなら、幼児の興味は、永続性の少ない、変りやすいものであるから、一つのきめられた枠内だけで子どもの活動を予測することは、無理なことである。よい保育計画は、幼児の興味にもとづいたものでなければならない。幼児の興味は、少しのきっかけ、少しの刺激、環境の変化ですぐ変ってしまう。したがって、わたくしどもの保育計画は、幼児の興味の変化に応じられる、融通性のあるものがよいのである。わたくしどもは、たえず幼児に目をとめ、幼児の状態を観察し、幼児の発達と必要性を知り、彼らの興味の所在を知らなければならない。幼児の興味によって変る計画であれば、始めから何も用意せずに、そのとき、そのときで、計画なしでよいというのではない。筋の通った計画はぜひ必要で、計画を立て、一つの方向づけをたえずつづけていくのでなければ、わたくしどもは、目標にも達することができない。さらに、計画性のある保育によって、幼児は、知らず知らずのうちに計画性を身につけていくのである。